様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年６月１日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：２００６～２００８
課題番号：１８５２０３４６
研究課題名（和文）　三者面接調査における回答者間相互作用のバリエーションに関する研究
研究課題名（英文）　Study on variations of interaction between respondents in three-party survey interviews

研究代表者
熊谷　智子（KUMAGAI TOMOKO）
独立行政法人国立国語研究所・研究開発部門・主任研究員
研究者番号：４０２０７８１６

研究成果の概要：面接調査は、調査者が質問して回答者がそれに答えるという一定の役割関係と参加／行動の枠組みを持つ、いわゆる制度的会話である。本研究では、調査者１名、回答者２名による三者面接調査において、行動枠組みから逸脱するかに見える回答者間の相互作用に着目し、その種類と談話進行上の働きを分析した。また、参加者たちが当該の行動枠組み自体を活用することによって各種の変則的行動を適切に位置づけ、協働的に談話を構築していることを明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,900,000	0	1,900,000
２００７年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２００８年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総　計	3,600,000	510,000	4,110,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学
キーワード：三者間会話、談話分析、面接調査談話、行動枠組み、質問－回答の連鎖

１．研究開始当初の背景

従来の会話・談話分析は、二者間での対話を主な研究対象としていた。三者以上のいわゆる多人数会話の研究は、近年、工学や認知科学の分野を中心に増え、話順のとり方などの談話管理メカニズムや会話展開の特徴などが分析されている。本研究は、言語行動研究の立場から、三者談話の枠組みにおいて特定の役割を付与された話者の相互作用や対人行動を、やりとりの文脈において分析・考察するものである。

また、分析対象として取り上げられてきた多人数会話は、自由会話や討論が多かった。自由会話は特に決まった話者行動の枠組みはなく、討論も一定の目的や司会・討論者という役割は存在するものの、比較的自由に発言や議論が行われる。それに対して面接調査は、調査者と回答者の一問一答形式という、より局所的な行動枠組みに基づいて談話が構成されており、その枠組みと、多人数会話ゆえに生じてくる様々な現象との関わり、時には「せめぎ合い」がより観察しやすいという点が、従来の分析対象と比べて特徴的な点である。

２．研究の目的

調査者が質問し、回答者が答えるというやりとりが基本になる面接調査であるが、三者面接調査では回答者が二人いるため、調査者と回答者の間のやりとりに加えて、回答者同士での相互作用が現れ、それが調査談話の進行や展開に様々な影響を与える。本研究の目的は、回答者間の相互作用とそれを含む調査談話に関する以下の点について知見を得ることである。

(1) 回答者間相互作用として、どのような種類の行動が見られるか
(2) 回答者間相互作用によって、面接調査の談話にどのような影響が及ぼされるか
(3) 回答者の親疎関係によって相互作用に違いが見られるか
(4) 回答者の出身地域によって相互作用に違いが見られるか
(5) 回答者間での相互作用は、面接調査談話において「逸脱的」行動となっているのか、あるいは何らかの形で適切な行動として位置づけられているのか

３．研究の方法

回答者２名と調査者１名による三者面接調査（40～50 分）の談話データを収集し、談話分析の手法で分析を行った。回答者ペアは同学年・同性の大学生とし、親疎については友人ペアと初対面ペアを作った。調査者は回答者と同性になるようにした。また、地域差を見ることを考慮して、秋田、東京、大阪を対象地域とし、回答者を地域ごとにそこで生まれ育ち、現在も居住している人に限定した。収集した談話数は、秋田 14 件、東京 15 件、大阪 15 件（計 44 件）である。回答者の親疎関係および性別によるデータの内訳は、以下のとおりである。

＜秋田＞
　男性　友人ペア３件　初対面ペア４件
　女性　友人ペア３件　初対面ペア４件
＜東京＞
　男性　友人ペア４件　初対面ペア３件
　女性　友人ペア４件　初対面ペア４件
＜大阪＞
　男性　友人ペア６件　初対面ペア３件
　女性　友人ペア３件　初対面ペア３件

記録は録音と録画で行い、いずれも電子化データとして整備した。

４．研究成果

分析の結果、以下の知見が得られた。

(1) 回答者間相互作用の種類

以下のような種類の行動が見られた。

・自分の回答中にもう一人の回答者に同意や確認を求める
・もう一人からの同意要求や確認に応える
・もう一人の回答者が回答している際に、コメントをはさむ
・自分の回答に対するもう一人からのコメントに応答する
・もう一人の回答に対して相づちや非言語的反応（笑い、うなずきなど）を発する
・もう一人が回答として述べたことをふまえた回答を行う
・二人の回答者がで掛け合いのように発話して回答を行う

(2) 回答者間相互作用の面接調査への影響

回答者間相互作用は、調査談話にとって脱線などの阻害的要因になるというよりは、調査者との一対一での調査よりも回答者の発話行動や談話への参加の仕方を多様化することにつながっている。相互作用によって、「調査者の質問に各々が個別に答える」以外の回答行動タイプとして以下のようなものが見られた。

・一人の回答者の発話がきっかけとなってもう一人の回答が引き出される
・もう一人の回答に対する相づちや反応が間接的な回答になる
・共同構築的に双方から回答発話が積み上げられていく
・合いの手を含む「おしゃべり」的なやりとりの中で回答がなされる

また、回答者間相互作用による談話行動としては以下のようなものが見られた。

・話題を操作する
・調査質問へのコメントを行う
・聞き手としての受けを行う
・もう一人の回答について解説する

(3) 回答者の親疎による相互作用の違い

上記(1)であげた回答者間相互作用の種類は、いずれも、回答者間の親疎にかかわらず観察された。

しかし、相互作用によって達成されることとしては、友人間の場合は互いの回答行動を補助し合うものが多いのに対し、初対面同士の場合は相互の関係構築の要素が多いという傾向の違いが見られた。

また、初対面の回答者同士の場合、どちらかからの働きかけによって互いにやりとりをするほどの直接的な相互作用が起こった場合には、それをきっかけにその後の相互作用がより活発かつ直接的なものになっていくという変化が見られたが、片方の回答にもう片方が脇から相づちや反応を返す程度のより間接的な相互作用が続く限りにおいては、時間が経過しても相互作用には特に変化が見られなかった。

(4) 出身地域による相互作用の違い
　回答者の出身地域による違い、すなわち回答者間相互作用の地域差については、現時点ではまだまとまった結果を得るにいたっていない。今回得たデータをもとに、今後も分析を続けたいと考えている。

(5) 変則的な行動と談話の枠組みの関係
　「調査質問－回答」による情報授受を目的とする面接調査の枠組みに照らした場合に変則的と考えられる行動として、①参加者間の共感表出行動・関係構築行動、②調査者に直接答えを返さない行動を分析し、調査談話の行動枠組みとの関係を考察した。

①　回答者間、および調査者も含めた三者間での共感表出行動・関係構築行動
　回答者間の共感表出行動、関係構築行動としては、一人の回答者の発話をもう一人の回答者がくり返すことによって同意を表明したり自身の回答を行ったりする、あるいは一人が回答として語った経験談と類似の経験を別の参加者も語るという、「発話や語りの重ね合い行動」に着目した。
　他者の発話をくり返すことは、先行研究においても共感表出の重要な方策として指摘されている。今回のデータでは、回答者間相互作用の活発なペアには互いの発話のくり返しも数多く見られた。
　類似の経験談を重ね合うことも、互いの共通性を間接的に表示し合うということで、共感表出や関係構築につながる行動である。しかし、そうすることにおいて、時には話が調査質問の趣旨からやや離れる方向に行ったり、原則として一問一答のパターンで進んできた調査談話において一人の回答者が複数回回答を述べる機会を求めたりといった、調査の枠組みへの抵触が起こる可能性も出てくる。また、調査者が自身の類似の経験に言及する場合には、役割の上では「質問者」である者が自ら語りを行うという変則性につながることになる。
　そうした場合、二人の回答者は各々自分の経験談と調査質問との関連性を際立たせたり、より調査回答として複雑で興味深い事例として話を提示したりするなどの工夫で、自身の語りを調査談話のやりとりの中に適切に位置づけていた。また、調査者も、自身の経験を、自らの情報提供というよりは回答への「受領のコメント（具体例を添えた肯定）」として述べていた。これらのことから、枠組みに照らすと変則的になり得る行動をする際にも、回答者・調査者は自らの役割に引き付けてそれらが妥当性を持つようにしていた、すなわち、調査談話の枠組み自体を利用することで、行動の適切な位置づけを行っていたと言える。

②　調査者に直接答えを返さない行動
　ある友人回答者ペアの片方は、質問に対して、回答となる情報を直接調査者に述べることをほとんどせず、代わりに傍らにいる友人（もう一人の回答者）に対して述べる形をとっていた。
　こうした行動に対して、当該の回答者も含む三人の参加者全員の調整行動が見られた。まず、もう一人の回答者（当該の回答者の友人）は回答の助け舟を出したり、自分たちのやりとりを総合して代表として調査者に答えを返したりしていた。調査者は、当該の回答者がもう一人に向けて述べた発話に対して、脇から「ああ、なるほど」などの受領の発話を返すことで、それを質問への回答として位置づけていた。そして、当該の回答者本人は、回答を直接返さないこと以外の点では調査への協力的・積極的姿勢を見せるとともに、調査者の受領発話に対しては応答を返すなどして、「回答者らしい行動」を見せていた。これらは、「（調査者の）質問－（回答者の）回答－（調査者の）受領－（回答を行った回答者の）承認」という調査談話の典型的な発話連鎖構造を活用した調整行動である。ここにおいても、いわゆる変則的な行動が参加者間の相互行為の中で適切に位置づけられていること、そして、面接調査という制度的会話の枠組みが単なる静的なルールとして存在するのでなく、参加者の行動を適切に位置づけていくための動的なリソースとして活用されることが示された。

(6) 本研究での面接調査は、分析用談話データの収集を主目的として行ったものであるが、副次的成果として、面接調査の回答内容から、大学生の敬語意識、対人行動意識に関する知見を得た。それをもとに、学会のシンポジウム、ワークショップで２件の発題（下記の学会発表④および⑥）を行った。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
①熊谷智子、木谷直之、「質問者に直接返されない＜回答＞ ―三者面接調査における連鎖交渉―」『社会言語科学』第 12 巻第 1 号、ページ未定、2009 年（刊行予定）、査読有り
②熊谷智子、木谷直之、「発話のくり返し、語りの重ね合い ―三者面接調査における共感表出行動―」『待遇コミュニケーション研究』第 6 号、65－80、2009 年、査読有り

〔学会発表〕（計７件）
①熊谷智子、木谷直之、「三者面接調査にお

ける経験の語り合い －初対面回答者による『共-成員性』の表示と調査談話への適応－」、社会言語科学会第22回大会、2008年9月13日、愛知大学

②熊谷智子、木谷直之、「質問者に直接返されない『答え』 －三者面接調査における参加者の談話構築－」、社会言語科学会第21回大会、2008年3月22日、東京女子大学

③熊谷智子、木谷直之、「面接調査談話における共感の表出 －他者の発話のくり返し、言語行動のくり返し－」、待遇コミュニケーション学会2008年春季大会、2008年3月15日、早稲田大学

④熊谷智子、「『敬語』をどうとらえるか」、社会言語科学会第20回大会、2007年9月16日、関西学院大学

⑤木谷直之、熊谷智子、「三者面接調査における初対面回答者の参与行動」、社会言語科学会第19回大会、2007年3月4日、日本大学

⑥熊谷智子、「言語行動と『属性』」、社会言語科学会第19回大会、2007年3月3日、日本大学

⑦熊谷智子、木谷直之、「回答中にやりとりが起こるとき －三者面接調査における回答者間の相互作用－」、社会言語科学会第18回大会、2006年8月27日、北星学園大学

６．研究組織

(1)研究代表者

熊谷　智子（KUMAGAI TOMOKO）
独立行政法人国立国語研究所・研究開発部門・主任研究員
研究者番号：40207816

(2)研究分担者

木谷　直之（KITANI NAOYUKI）
政策研究大学院大学・政策研究科・教授
研究者番号：30397103
※2007・2008年度は研究協力者

熊谷　康雄（KUMAGAI YASUO）
独立行政法人国立国語研究所・情報資料部門・部門長
研究者番号：30215016
※2008年度は連携研究者

三井　はるみ（MITSUI HARUMI）
独立行政法人国立国語研究所・研究開発部門・主任研究員
研究者番号：50219672
※2008年度は連携研究者